

占領下日本語教育はフィリピンでいかに記憶されたか ——普通教育をめぐる日米帝国間関係

木下 昭

はじめに

アジア太平洋戦争中、日本は主に現在東南アジアと呼ばれる地域に勢力圏を拡大した。これによって多くの地域で、後発の帝国であった日本が、欧米諸国にとってかわって統治権を得ることになった。したがって、この支配の交代によって生じた変化を被支配者がどのように受け止めたか、そのなかで新旧帝国間にいかなる関係が見出せるか、これらを論じることは日本帝国に対する考察を深める上で極めて重要である。

この帝国支配の移行に伴って、日本が占領下で力を注いだのが日

本語を中心とする教育である。なぜなら、教育により社会の根幹である言語や思想を統制することは植民地支配の王道であり、しかもかつての支配者の影を解消することにつながるからである。したがって、この教育に焦点を当てることは先の問いの核心を突くものになる。この観点で貴重な事例となるのが、フィリピンである。というのも、他の大部分の地域で西欧諸国は、一般的・基礎的な知識・教養を施すことを目的とする普通教育を被支配者に実施せず、コラボレータとなる特権階級に宗主国の言語教育を限定することが多かったからである。したがって、教育に関する日本と欧米帝国との関係を扱った研究としては、これまで比較的小さな教育機関、例えば日本統治下のキリスト教系私立校や高等教育機関の卒業生を対

象としてきた。⁽¹⁾しかし、普通教育のもつ重み、すなわち帝国側が注

力した人的物的費用の大きさや言語能力などの被支配者への広範囲に及ぶ影響に鑑みると、この教育を要に帝国、そして帝国間関係を論じる意義は高い。そこで、フィリピンが注目されるのである。

フィリピンは、全土で普通教育が複数の帝国によって施されたアジアでは希有な地域である。アメリカは、アメリカ・スペイン戦争後の一八九八年にスペインからフィリピンの統治権を得た後、文明化、すなわちアメリカ化を推し進めるためアメリカ本土から教員を送り込み普通教育を導入した。この結果、人材や財政の制約があったものの英語の普及に見られるように一定の「成果」を上げた。これに対して対米戦争開戦後の一九四二年にフィリピンを占領した日本も日本人教員を送り込み、日本語を中心に大東亜共栄圏構想を受容させるべく日本式の普通教育政策を展開した。本論では、この経過を踏まえて、日本占領下の普通教育に関するフィリピン人たちの記憶を分析する。

これまで、フィリピン統治の日本語教育についてはさまざまな研究がなされてきた。例えば教材や教授法、教育制度・政策、あるいは普及理念について取り上げたり、また派遣された日本人教員の記憶を分析したりするものである。⁽²⁾しかし、日本による教育がフィリピン人たちにどのように意味づけられたのか、そのなかで先行したアメリカ支配がどのような影響を与えているのかを論じたものは、

ほとんどない。

そこで本論では、日本語教育に対してフィリピンの人々に残された記憶を、これまで当地で出版された回想録、ならびに聞き取り調査結果を利用して検討し、普通教育を軸とした日本帝国と欧米帝国との関係を考察したい。具体的には、フィリピンにおけるアメリカ統治および日本統治関連の多くの資料を所蔵しているアテネオ・デ・マニラ大学の所蔵資料のうち、(World War 1939-1945 — Personal narratives, Filipino) と (Philippines — History — Japanese occupation, 1942-1945 — Personal narratives, Filipino) のタグがついているもので、同作者同作品を除く四五の英語著書を中心に調査した。これら大部分が戦争経験者自身の作品であり、英語教育を受け、自著を出版できる恵まれた社会層に位置する人々の見解に偏ることは避けがたい。そもそも、フィリピンは植民地支配を契機に国境線が引かれた「多言語多民族国家」であり、今日ですら国民形成が進んでいないとされる⁽³⁾。したがって、ここでの議論は「フィリピン」と呼ばれる地域に残った個々人の記憶を扱っている。ただし後述するように、彼らの記憶へのフィリピン社会の影響は無視できない。

さらに明示すべき点は、日本語教育に言及している回顧録が少なく、たとえ触れていたとしてもわずかな記載にとどまる文章が多かったことである。回顧録の大部分は、日本軍による抑圧や戦火、そしてゲリラ活動といった苦難にいかにかたち向かったのかに焦点を

あてている。これは、そこがもつとも語りたい、また一般的に需要のある「物語」であるためであろう。^④ 日本語教育は、多くの場合これにあたらなと考えられる。それは、本稿で取り上げている日本語教育に関連する記憶の多くが、研究者のような第三者の調査・編纂による書籍から引用されたものであることから示されている。本稿は、このような限界を踏まえて、フィリピン側の記憶を分析する。

これにあたつて注目するのは教室という場である。というのも、教室はいわゆる「コンタクト・ゾーン」と考えられるからである。コンタクト・ゾーンは、植民地状況下における支配者と被支配者が邂逅する空間を論ずるための概念としてメアリー・L・プラットによつて提起され、現在はさまざまな事象の分析に用いられるようになつている。^⑤ 言語や思想を統制する教育が実践される場である教室は、植民地支配を考察する上でもつともふさわしい空間といえる。したがつて、教室を巡つて提示されるフィリピン人の日本占領期の記憶、なかでも当事者である教師と生徒を主に取り上げたい。

本論の構成は、まず第一章でフィリピンにおける日本語教育の概要を押さえる。次に第二章で、日本語教育に関するフィリピン側の記憶を教師と生徒を中心に整理する。つづく第三章において、記憶が語られる場に影響を与えたポスト・コロニアルな国際関係を論じる。そして第四章で、彼らの記憶を生み出した要因について、フィ

リピン・アメリカ・日本の関係に注目して分析したい。

一、占領下における日本語教育の展開

一九四一年一二月のアジア太平洋戦争開戦後、日本の支配圏は南方各地に及び、日本語教育は、この地域における占領政策の主軸の一つになつた。これは、占領実務の遂行と日本支配の正統性の浸透といった根本的な課題の達成に不可欠であつたからである。この日本語教育に関する政府の方針は、一九四二年八月に閣議決定した、「南方諸地域日本語教育並普及に関する件」で示された。これによると、日本語教育ならびに日本語普及に関する諸方策は、陸海軍の要求に基づき文部省において企画立案することになつていた。使用する教科書や教員についても、同様の枠組みで規定されており、軍の主導が明示されていた。^⑥

この閣議決定以降、南方での日本語教育が組織化されていくが、フィリピンではこれを先取りする形で、当地を支配した軍が一九四二年二月に教育方針を打ち出していた。そのなかで重視すべき点として挙げられたのが、①東亜共栄圏の一環としての新秩序建設の意義の認識、②米英依存の思想の根絶と東洋人としての自覚に基づくフィリピン文化の建設、③物質偏重の排除と道義の涵養、④日本語の普及と英語の使用の漸次廃止、⑤初等教育の普及と実業教育の振

興、⑥勤労精神の鼓吹、以上の教育の六原則で、公用語となった日本語の教育はこれら全体の基盤であった。しかし、④にあるように、英語が即時廃止にならなかったのは、約四〇年にも及ぶアメリカの普通教育政策の結果、英語が社会に浸透しており、これを一気に取り除くことは社会的混乱をもたらすことが自明であったからである。^⑦

この方針を前提として、一九四二年八月初めごろから学校が本格的に再開してゆく。日本の占領統治が始まった当初は、日本語教育の大部分を兵士が担っていたが、治安が安定するにつれて専門家を内地から呼ぶ必要性が意識されるようになった。そこで、一九四三年一月末、三月半ば、一〇月初旬の三回にわけて、日本語教員たち一八〇名あまりが送り込まれた。彼らの多くは、一般応募からの選考をへて、首都マニラのあるルソン島を中心に派遣された。その募集にあたって要件とされたのが、英語能力であった。これは、先述のようにフィリピンにおける英語の影響力が大きく、当座の使用は認めざるを得なかったからである。当初は比較的安定した治安のもと教務を果たせたが、アメリカ軍の反攻とともに各地で日本語教育が中止され、一九四四年五月には大部分の女性教員たちは内地へ避難し、同年九月二一日のマニラ空襲の前後で実質的に教員としての任務は終焉を迎えたと推定される。

二、日本語教育の記憶

推定一〇〇万人を超える現地人の死を残し、最大の賠償金が日本から支払われたことでも示唆されるように、フィリピンは日本の帝国支配の暴力性をもっとも顕在化した地域の一つといえる。こうしたなかで展開された日本語教育は、フィリピンの人々にとって、どのような存在として記憶されたのだろうか。

回顧録に日本語教育に関する記述が少ない要因としては、先に述べた事情の他にも日本統治時代に公的な教育を受けていない人が多数いたことがある。そもそも日本の教育行政の基盤となったアメリカ統治期の公教育も不完全なものであり、多くの不就学の児童が存在した。^⑧その上で、人材・教材の不足、そして治安の不安定さなどにより、日本統治期に再開されなかった学校が、セブやレイテなどさまざま地域に広がっていた。^⑨例えば、日本軍の教育方針でも重視されており、イデオロギー宣伝の基盤として優先して再開された初等教育でさえ、一九四三年三月の時点での報告では、開校数一二二七校、登録生徒数二六万七九七七人となっていた。これらの数値が日本による教育の最高到達点であったかどうかは不明だが、戦前の開校数八七二四校、登録生徒数一三二万四三三五人という数値と比べて著しく少なかったのはまちがいない。^⑩生徒側の不就学の理由と

しては、彼ら自身の経済的な苦境もある。文献に表れた例を挙げる
と、学校は再開されたものの、食料調達のための取引に行かざるを
えなくなつた生徒や、野球のグローブをつくっていた学齢期の少女
たちがいた。また家族、とりわけ父親の意思で教育を受けられな
かつた人達もいる。これは、親たちのナシヨナリズムや愛国心に基
づく日本支配への抵抗の一環である。教育を重視する親の場合、彼
ら自らが教育を受けたり、日本軍政当局の目を逃れて「地下」学校
に通わせたりした。¹¹⁾

このような限界はありつつも展開された日本占領下における教育
の現場に関して、どのような言説が残されたのだろうか。再開され
た公的な教育機関では、日本人教師の指導の下、教育を施す側に
フィリピン人がいた。突然強制された日本語教育に対する抵抗感が、
フィリピン人教員たちのなかにあつたことは、その言動から日本人
教員も察していた。¹²⁾ もちろん、目の届かないところで彼らが教室で
生徒に何を話していたのか、日本人には知るよしもなかった。フィ
リピン側の記憶では、例えばあるフィリピン人女性教員は、授業の
なかで繰り返し生徒たちに、日本の占領支配は一時的なもので、す
ぐにもとの状態に戻る、アメリカがフィリピンに帰ってくるのに長
い時間はかからない、と述べていたことがわかる。後に、彼女は抗
日ゲリラに加わっている。¹³⁾

しかし一方で、日本語教育への関わりに、より積極的な視点を見

出す教員もいた。彼らの言説には、日本語教育との関わりだけでな
く、日本人との関わりにおいても肯定的な見解が含まれる。たとえ
ば、日本語を担当することになったルソン島南部のシポコットの
フィリピン教員は、次のように述べている。「私は小学校が再開
されたとき、教鞭を執るように頼まれました。日本軍政当局のもと
で教えることは、楽しかった。私個人の意見ですが、日本人はいい
人たちで、私たち教員を敬意と寛容をもつて処遇してくれました。
日本語を教えることができるようになるために、毎週土曜日、日本
人教師のもとで学習することが求められました。若かつた当時、教
えることや優しい日本兵たちと親しくなることを楽しみました。」¹⁴⁾

このような教員側の対応に対して、教えられる側にはどのような
記憶が残つたのだろうか。例えば、小学校三年生の時に再開された
学校に復帰したキンターナは、日本語の会話と作文を習い、日本語
とタガログ語で表現するようになった。英語で話すことは完全に止
められ、「私には何が起つているのかわかりませんでした。私が日
本について悪口を言うたびにストレスがたまつておどした先生
は、普通に詮索好きな少年の心にうまく答えることができませんで
した。日本人の監視の目を恐れている教師から小言を言われること
なく、みんなが好きにものを言い、行動できた戦前のよかつた時代
がもどつてくることを切望していました。人生で初めて憎しみとい
う言葉の意味を学びました。」¹⁵⁾ この種の言説からは、日本人に対する

恐怖が教室内に満ちていたことを察することができる。

こうした学校内の空気に、カリキュラムの変化も影響した。公教育の場では、アメリカ帝国の色を払拭し、大東亜共栄圏構想に沿ったものに置き換えるべく、禁書措置が執られ、使わざるを得なかったアメリカ製の教科書は、アメリカ関連の人物や場所の写真や文章が黒塗りにされたり、取り除かれたりした。また西洋文化の影響の濃い地理、歴史や文学といった科目が変更・中止された¹⁶⁾。ラジオ体操を含めて、これらの日本式教育導入の結果、真剣に勉強することをやめる生徒たちが出てきた¹⁷⁾。このように子供の側でも、新しい教育内容に拒否反応があつたようだ。これらの言説には、日本支配、その一角を占めた日本式教育に対する否定的感情、そしてこれと対の関係にあるアメリカの影響下に構築された戦前の教育に対するノスタルジアが見て取れる。

ところが一方で、日本語学習に楽しさややりがいを見出した者もいた。マニラに居住していた男性の妹は「日本人によつて日本語教育が提供されるようになったとき、ただ楽しさから日本語を勉強した¹⁸⁾」ようだ。また、日本の占領統治が始まった当時一三歳だった男性も、明解な英語を話すことができる日本兵の担任教師から日本語の基礎を学び、日本の文字を書くことを級友とともに楽しんでいったという。日本語を書き話するための知識を得るのにも積極的で、日本について、人々の生活、文化や伝統、天皇、侍に代表される日本の

「封建時代の話に関心を持ち、日本国歌を習った。日本語の正しい書き方を個人的に教えてくれた日本兵の友達によつて、「物語のなかだけでしたが異国への冒険に対する、また教育に対する私の渴望はある程度満たされました。」と述べている。これらは、日本語学習にフィリピン生徒が熱心に取り組んだとする日本語教員の記憶と符合する¹⁹⁾。

教室の様子にも、先に触れたような日本軍がもたらした緊張や恐怖とは真逆のものがある。公立高校に通っていた男性（ルソン島中部のラグナ州）が、その兄弟に語ったところによると、彼の日本語教員はミスター・モツイモト（Motsuimoto）といい、見たところ愚鈍そうで、神経質な少女のように話し、服装も珍妙に見えたこともあつて、クラスメイトのなかでは、笑いものになつていた。ある日、先生が日本の曲を歌わせていたとき、「生徒たちは、彼が見落としていた」「こと」に気づくのを、息を殺して待つていた。しかしもう彼らは待ちきれなくなつて、声を出して笑い、手をたたいた。モツイモトは静かにするように合図をして、両手を下げてポケットに入れたとき、ボタンを閉め忘れていたズボンの前が大きく開いた。クラス全体がさらに大爆笑になり、拍手が大きくなつた。先生は怒りもせず、素早くズボンのボタンを留めて、静かに恥ずかしさを我慢していた²⁰⁾。この人物の行動は、気に触れることがあればすぐに怒鳴りだしたり、平手打ちしたりしたフィリピン人のなかにある典型的

な日本軍人像には全く沿わない。

知的好奇心の対象となったり、教員との関係が良好に構築されたりすれば、反日感情がありながらも、強制的な日本語教育に積極的な意味を見出すこともあった。例えば当時高校生だった女性の母親は、日本への敵意を明確にしており、ラジオ体操や日本軍歩哨への敬礼を子供にさせなかった。こうした両親の影響を受けて、彼女も日系人のクラスメイトのいないところで反日感情を表に出したり、学校の近くに連行されたアメリカ人に、こっそり手を振り、Vサインを送ったりしたこともあった。こうした反日感情とアメリカ帝国支配の復活への期待がありつつも、日本語教育の記憶には肯定的な面がある。彼女は「日本語はもちろん必修科目でした。日本の文字を書くのが楽しかったので、日本語の授業はおもしろかったです。私たちの担任は、ミス・ツナシマという名前の優しい先生でした。先生は『さくら』という有名な日本の歌を教えてくださいました。ある日、先生は私をそばに呼んで、私のきれいな習字を褒めてくれました⁽²²⁾」と記している。このように日本の支配への抵抗感を持っていた生徒にも、日本語学習に積極的な意味を見出している場合があった。こうした語りから、日本占領下、日本語に取り組まざるを得なかったフィリピンの人達の状況を察することができる。注目すべきは、旧支配者のアメリカに対する意識と、日本語教育や教員に対する記憶が多様なことである。

三、日本語教育の記憶と戦後国際関係

前節冒頭で述べたように、日本によるフィリピン支配の暴力性はよく知られている。したがって、理不尽な平手打ちのような辱めと結びつく *Kunai* (くらい) と残忍な拷問と死が結びつく *Kempeitai* (憲兵隊) が、フィリピン人の記述にしばしば登場するのは、耳に残る日本語が象徴する日本統治の姿といえる⁽²³⁾。つまり、この *Kunai* と *Kempeitai* は、緊張や恐怖や暴力にあふれた社会における、無力な被支配者に見られる「均質化の語り」と捉えられる⁽²⁴⁾。教室での否定的な記憶は、日本の帝国支配のもたらした語りの均質化の一翼を担っているといえる。一方で、これと真逆の、たとえば日本語を学ぶに当たっては主体的な自己の意思があったこと、あるいは教員との肯定的な関係が維持されていたことを示す「異質な語り」もある。この種の語りの意味するところは何であろうか。まずここでは、そもそもこうした語りが受容されるようになった社会的背景を考察してみたい。

戦時における出来事の記述や聞き取りによって残された記憶が、当該事象が生じた時代に得たもの自体ではなく、あくまでそれを想起した時点から見た過去という性格が付与されることは、今日しばしば指摘されるところである⁽²⁵⁾。しかも、その構築は、個々人で完結

しているわけではなく、当事者を取り巻く社会的関係が影響し、記憶の語りや提示を根底から規定するマクロな「語りの磁場」が存在する⁽²⁶⁾。そこでここでは、占領時の日本語教育に関する記憶の異質性を、語りの場であるフィリピン社会と、日本およびアメリカ両国との戦後の関係から論じたい。

三― フィリピン・アメリカ関係

基点となる終戦直後、日本統治がフィリピン人にもたらした衝撃は、アメリカ植民地期が「黄金の時代」であり、日本占領期が「暗黒の時代」という歴史言説を作り出すことを可能にした。また、フィリピンを解放するためのフィリピンとアメリカの共同戦線は、フィリピン人とアメリカ人の兵士たちが力を合わせた犠牲的行為、つまり共通の受難・死・復活として解釈された⁽²⁷⁾。こうした解釈の基盤が、フィリピン・アメリカ、そしてフィリピン・日本の関係の変化にどのように影響されたのかを見てゆく。

まず、アメリカとフィリピンとの関係に焦点を当ててみたい。先述のように日本占領期についての認識は、アメリカに関する認識と密接に関係しており、実際、引用した回顧録のいくつかでもそれが察せられる。したがって、戦後フィリピンにおける対米感情の推移を押さえておく必要がある。

戦後、アメリカが解放者となったことにより、合衆国市民・企業

に対する特惠や基地提供のような植民地関係は継続することになった。以降のフィリピン・アメリカ関係は、このコロニアルな性格が暫時希薄化してゆく歴史と解釈できる。これには、一九七四年の特恵通商関係や内国民待遇の終了、日本の台頭による通商関係におけるアメリカの相対的地位の低下がもたらしたところが大きい。さらに重要な意味を持ったのはアメリカ軍基地の存在である。一九四七年の基地協定で米兵などの司法管轄権や基地使用の権限に関して一方的にアメリカ側に便宜が提供された。この基地の存在は米兵が繰り返す犯罪、ベトナム反戦運動や学生運動とあいまって、反米ナショナリズムの象徴となつてゆく。このフィリピン側の基地反対運動、ナショナリズムの高まり、アメリカ側にとつての基地の戦略的地位の低下や維持のためのリスクやコストの上昇、アメリカの支援下で独裁政治を行ったマルコス政権の崩壊、そして一九九二年のピナツボ山の噴火被害により、スービック、クラーク両軍基地は完全撤収に至る⁽²⁸⁾。これにより、一八九九年以降の軍事力を背景としたコロニアルな二国間関係に一つの区切りがついた。

こうした流れとともに、政治軍事面あるいは経済面でのアメリカの影響力が衰退してきたことは、アメリカと日本を善悪として対比する見方を希薄化する背景となつたと考えられる。その上で、より直接的な影響を与えたものとして、次の二つをあげることができよう。一つは、フィリピン社会で広く受容されてきた植民地支配を正

当化するアメリカ側の論理、すなわち、恩恵的同化としての文明化を否定するレイナルド・C・イレートのような知識人が登場してきたことである。例えば、著名な歴史学者テオドロ・A・アゴンシリヨは、その著書『運命の歲月——フィリピンにおける日本の冒険一九四一—一九四五』で、日本の教育行政を、外からの強制という点でスペインとアメリカの施策と同列に位置づけ、日本によるアメリカ化の否定は日本の国益に沿ったものであるとしつつも、アメリカ化がフィリピン人からアジアの美德を失わせたという日本の主張には一理あるとしている。⁽²⁹⁾

もう一つは、退役軍人問題である。これは、抗日ゲリラとして対日戦争での勝利に不可欠な役割を果たしたフィリピン人に、その対価であるはずの退役軍人としての権利が付与されなかった問題である。戦後まもなくこのことが浮上し、とりわけ一九九〇年以降大きな問題となった。⁽³⁰⁾これはアメリカのための戦いが報われなかったという認識を生み出す要因の一つになったと考えられる。例えば一九四二年当時一三歳だったマニラ在住のオスカーは、日本語を学ぶとともに、日本軍関係のビジネスに関わり、マッサージ・靴磨きで軍人から金銭を得ていた。そのなかで靴磨きの費用をこまかされた上に柔術で痛目に遭わされた軍人のことを書き、多くのフィリピン人は、大東亜共栄圏のスローガンである「アジア人のためのアジア」のような日本人のプロパガンダによって多少なりとも洗脳され

ていたと当時を否定的にふり返っている。しかし一方で、「私たちがビッグ・ホワイト・ブラザー」を装って、アメリカ人も汚いプロパガンダ活動を行っていたという批判的認識も表明している。⁽³¹⁾こうした認識に退役軍人たちの処遇も影響していたと考えられる。

フィリピンでは、日米二つの帝国支配が重なったため、それぞれの評価を完全に分離して行うことはできないと考えられる。したがって、アメリカ植民地期が「黄金の時代」という認識が薄れ、ビツク・ホワイト・ブラザーが幻想であるとかわかったとき、日本統治の意味が否定的な解釈に限定されない余地が出てきたのだろう。

三二 フィリピン・日本関係

アメリカとの関係は前節のように変化したのに対して、戦後日本とフィリピンとの関係に見られる大きな流れは、占領体験に基づく反日感情が徐々に沈静化する過程であつたといえる。そこには経済成長を背景にした日本の影響力の拡大がある。一九七〇年代になると、日本の通商および投資に門戸が開かれ、日本人が戦没者の慰霊碑を建てることも許されるようになった。一九八〇年代になると日本からの投資が拡大し、フィリピン人のなかには日本軍の残虐行為の話を持ち出すのは賢明ではないと公言する者も出てくる。⁽³²⁾こうした風潮は、フィリピン国内の日系人たちの行動にも反映されている。反日感情から出自を隠して生きてきた彼らが、一九八〇年代初頭に

はフィリピン日系人会を公益法人としたり、初めて海外日系人大会に参加したりして表舞台に出られるようになった。

日本占領時関連の文献で、この変化への対応が明示されるのが、一九七八年発行のアルフォンソ・P・サントスの『フィリピン戦線の日本兵——草の根の証言集』である。その冒頭に、フィリピンを占領した日本兵がすべて残虐であつたわけではなく、この書は日本占領期に日本人がフィリピン人に与えた親切な行為に触れるものであることを明記している。そしてこの出版を導いたのは、フィリピン人と日本人が平和のために和解し、国際社会の構築に寄与する時代になったという信念であるとしている。⁽³³⁾ フィリピン社会における変化のなかで、こうした趣旨の書籍を発行することが可能となり、この種の事業が契機となつて、日本人との肯定的な関係が部分的であれ、記述されたり語られたりするものがさらに世に出てきたのだろう。例えば、多くの証言を集めた『日本統治下のフィリピン——記憶と省察』では、「親切な日本人」の節がもうけられ、個人の回顧録である『マニラ——第二次世界大戦の思い出』には、戦前の出来事を含め、単に抑圧や暴力だけではない、日本人とのさまざまな交流の場面が描かれている。⁽³⁴⁾

この延長線上で、前節で触れたような教える側にしても学ぶ側にしても、日本占領下の教育に対する積極的な態度をとつた経験の表記が可能になったと考えられる。もちろん、日本統治時代の悪夢が

完全に消えることはなく、当時の日本語学習に対する否定的な感情は表明されている。例えば、占領下で日本人と交流が深かった者について「日本人(セ)」に取り入ろうとするフィリピン人には日本語の知識があるものがいたね。たいてい彼らはもともと役人で、役所で高い地位に就いていた。あの人たちには、庶民は非常に怒つてたよ。内通者だよ！裏切り者だよ！」⁽³⁵⁾ という語りがある。日本語能力を保持した側もこうした感情を意識していたのか、自分の能力のおかげで、日本兵とフィリピン人とのめ事を大事に至らせず、あるいは無実の同胞を助けることが可能になったという物語がしばしば見られる。⁽³⁶⁾ ここには、戦中の日本軍と協力した行動を擁護されるようになったエリートたちと異なり、戦中の一般庶民の対日協力者が戦後さまざまな形で報復を受け、時を経ても名誉回復が進まなかったことも影響しているのかもしれない。⁽³⁷⁾

それでも全体としては、一九八〇年代以降鮮明となる対日感情の改善という点は、無視できない。さらに一九九〇年代に入ると日本の経済的影響力の浸透がさらに進み、フィリピンに進出する日本企業が目立つようになり、日本で働くことを夢見るフィリピン人が増加した。これにより日本の存在、そしてマイナスイメージでしかなかった日本語能力が積極的な意味を持つようになった。⁽³⁸⁾ この流れのなかで、過去の日本語教育に関して異質な記憶を表明することが可能になったと考えられる。

戦中に日本の教育を経験したフィリピンの人々は、戦中だけでなく、戦後も日米両国のせめぎ合いのはざまに位置した存在であった。フィリピン・アメリカ関係、そしてフィリピン・日本関係の変遷を見ていくと、太平洋戦争直後のフィリピンにとって善悪が明白であつた日米の位置づけが大きく変化したことがわかる。そのことが占領期の認識に反映し、日本統治時代の教育に関する異質な描き方が可能になつたのであろう。

四、二種類の教員と英語

これまで、フィリピンを巡る国際関係の変遷により「異質な語り」の余地が生まれたことを示してきた。では、そもそも日本語教育経験がフィリピン人に多様に語られる要因はどこにあるのだろうか。当然予期される、教育方針やフィリピン人への対応に関する地域的・時期的差異の影響はあるが、ここでは教室で主導的な役割を果たした教員を中心に分析したい。各教員の個性を超えた差異として注目するのは、教務を担った軍人（ここでは「軍人教員」とする）と民間人教員が併存していたことである。この前者については、先行研究はなきに等しい。というのも、日本統治の過程で、軍人が日本語教育を担ったのは一時的で、治安が相対的に安定してからは民間人が動員され、日本語教育が本格化したという印象があるからで

ある。しかし、日本語教育が普通教育として制度的に行われていたのは、一九四二年八月頃から一九四四年九月中旬頃までの約二年間で、そのうち民間人教員の大部分が派遣されるのが一九四三年一月末以降である。したがって、短くても六カ月間は軍人が主導し、民間人教員が赴任した頃には、これによつてある程度日本語教育は浸透していたと考えられる。というのも一九四三年二月一日に日本語によるプロパガンダ雑誌である『週刊ニツポンゴ』が創刊されたからである。その第一号に「ハジメ ハムヅカシイト オモツタニツポンノ コトバ モ コノゴロハ タノシク ベンキヤウ デキマス。」（二頁）という学習者による執筆という体裁の記事があるように、この雑誌は日本語のある程度の普及を前提としていた。したがって民間人教員派遣前、軍人教員は日本語教育の構築に大いに寄与したといえる。

また、民間人教員の派遣が始まつた後も、地域によつてはその配置がなされなかつたところもあつた。元教員がまとめたデータに基づくと、彼らの約六〇％がマニラを中心としたルソン島に勤務しており、その他の地域には南部を中心に民間人教員の空白地が広く存在していたことがわかる。³⁹⁾例えば、その一つとして一九四二年二月から日本統治下におかれた中西部のパラワン島プエルト・プリンセサがある。ここで再開された学校教育の現場で日本語教育を担当したフィリピン人教員の一人によれば、三人の軍当局者が彼らの家に

出向き、義務であった学校での日本語教育のために講習を行った。

彼らは日本語の歌や国歌、一般的な表現を教えていたようだ。⁽⁴⁰⁾ また、ルソン島南西部近辺にあるアラバット島の警備隊の記録によると、一九四三年一二月頃、民間人教員と提携しつつ、所属軍人が小学校での日本語教育に継続的に携わっていたことがわかる。⁽⁴¹⁾ したがって、民間人教員到着以降も軍人の教育への関わりが継続した地域があり、フィリピンでは二種類の教員が併存していたのである。

このように、民間人教員到着以前、またその後も、軍人たちによる教育は無視できるものではなかった。教育を担った軍人たちに關しては、彼らが戦後民間人教員との交流もなく、本来の業務ではなかったこともあつて、残された記録は極めて少ない。⁽⁴²⁾ しかし、占領中日本兵によるフィリピン人に対する強圧的な行動が散見されたことを考えると、現地の人々から脅迫的と受け取られる乱暴な言動を見せた軍人教員がいたのだろう。⁽⁴³⁾ 一方で、生徒から嘲笑されていたモツイモトは、まず間違いなく民間人教員であろう。彼のエピソードは、フィリピン人生徒との間に当時の日本的な上下関係が希薄であつたとする元民間人教員たちの手記に通じるような内容であつた。⁽⁴⁴⁾ この軍民の相違が、教室におけるフィリピン人の記憶に影響していると想定される。

この二種類の属性に連動した、教員に対する認識の相違の要因をさらに探つてゆきたい。そもそも、占領時にフィリピン人たちはい

かなる日本人観を持つて、日本人と関係を築いていたのだろうか。

プラットのいうコンタクト・ゾーンには、「通常それは強制や徹底的な不平等や手に負えない対立を伴っている」ものの、単純で一方的な支配と抑圧ではなく、力関係は非対称性ではあるものの、相互交渉として見る視点が重要とされる。⁽⁴⁵⁾ これが、日本対フィリピンとの関係の場合、日本統治以前の植民地体験により、さらに複雑である。なぜなら、スペイン・アメリカの統治をへて、西洋化という文明化をフィリピンは長期にわたつて既に経験していたからである。

その結果、マニラのような都市部では道路や電気など社会インフラが整備され、教会によるキリスト教そして普通教育による知識・教養を受け入れている人も増加していた。この文明化の視点からは、軍勢力を除けば、決して日本に引けをとる存在ではないという意識を、フィリピン側に生み出した。

たとえば軍政要員として派遣された皇睦夫は、一九四四年後半にルソン島北部の比較的豊かな農村家庭に世話になったときに、この家の女性に基礎的な方程式の問題を出された経験を述べている。「こんな小娘にテストされてたまるか」と思いつつも、簡単にこれを解いてみせると、相手は驚きの表情を浮かべたという。⁽⁴⁶⁾ 当時憲兵であつた佐竹久もフィリピン人たちが「日本には電車があるのかとか、汽車があるのか等と、比島をさも文明国家のごとく思い込んでいたことは、まことに幼稚で滑稽でならなかった。」と述べており、

日本側の自己評価と相容れない日本観がフィリピンで広がっていたことがわかる。⁽⁴⁷⁾ この日本自体が遅れた国という認識を生み出した場の一つがアメリカ統治時代の普通教育である。日本占領前に小学校で使われていた教材を見つけた日本語教員の福原治夫は、そのなかで日本について、「ゲイジャガールとか腹切り、チョンマゲ姿の侍から飛脚や男女混浴、人力車などが絵入りで載っていた。又地球儀には中国と同じ色が塗られているのを見て如何にフィリピンが日本について認識不足かをつくづく感じた」と記している。⁽⁴⁸⁾ 支配者となった日本人に対するフィリピン人の視線は、こうした教育が基盤となっていたのである。

このアメリカの普通教育の核であったのが英語である。英語は、アメリカによって現地人の文明化（アメリカ化）を目指して、普及が図られた。この結果、一九三九年の統計において全人口約一六〇〇万人のうち、英語話者は約二七%となった。もちろん、全人口の四分の一強という比率は、アメリカ人による教育の限界を示している。しかし、一六世紀半ばからフィリピンの大部分を統治下においたスペインの場合、同じ統計でのスペイン語話者が約二・六%であったことと比較すると、約四〇年間のアメリカの教育成果は、大きかったといえる。⁽⁴⁹⁾ これにより、社会的上昇・地位の保全に英語は不可欠となり、結果的に社会層を区分する指標となった。このことが、日本人への評価にも関わっている。

つまり、日本を野蛮とみなす内容を含んだアメリカ治下の教育の上に、占領下における日本兵の乱暴な振る舞いを経験したフィリピン人にとって、日本兵一般の英語能力の貧困さは、その日本人観を象徴するものであり、補強するものであった。例えば、マニラのキアポ教会で日本兵が演説したとき、「the Japanese love the Filipinos」と言っているつもりが「the Japanese rob the Filipinos」と発音して、「聴衆は大声で笑うのを我慢できなかった。」なぜなら、それはフィリピン人が苦しんでいた現実だったからである。「大声で私たちは英語で叫んだ。『そうだよ、まさにそのとおりだよ！』日本人将校は、私たちの言葉を自分のことを認めてくれたものと解釈し、感謝の意を示した」。⁽⁵⁰⁾ これらのやりとりは、低レベルの英語能力が、日本軍政への不満とともに、日本人への蔑視へとつながっていることを示している。

一方で、英語力が社会的評価と結びついていたことは、その能力があれば、日本人に関しても、異なる認識をもたらしたことが想定される。実際、友好的な日本人の存在を示すエピソードには、「英語が上手」、「完璧な英語を話せた」といった英語能力とつながる言説が多くの場合付随している。⁽⁵¹⁾ そこにはコミュニケーションがとれることで、誤解や摩擦が避けられるといった実用的なことだけでなく、英語能力による人間の格付けが見て取れる。「確かにいい日本人もいました。ただ、まともな日本人は英語をしゃべることができ

るわずかな兵士だけでした。英語を知らなければ、その人はひどい

兵士です」。⁽⁵²⁾ こうした言説からは、英語は文明の記号として日本人

の選別に使われていたことがわかる。このことが、第二章で取り上

げたような肯定的な記憶が日本語教育や教員に付与される重要な要

因となつたと考えられる。具体例を付け加えると、ルソン島北部の

町で再開された学校で日本語を教えていた日本人について、教え子

と思われる人物の次のような語りがある。「私に語つた彼の言葉を

昨日のことはつきり覚えています。『なあ、私たちのほと

んどがやつぱりひどいやつだつたということになるのかなと思うけ

ど、君たちの幸せを思っていた人もいたことを忘れないでくれよ。』

とにつこり笑つて言つたんです。彼の話す英語はとても上手でし

た」。⁽⁵³⁾ 彼は地元の人々と友好関係をつくるために真摯に取り組ん

だ例外的な日本人として取り上げられており、彼が「文明的」で

あつたことを裏打ちする役割を、その英語能力の指摘が担っている。⁽⁵⁴⁾

フィリピン側の記憶にこうして登場する日本語教員については、

その人物を特定できないことがほとんどである。民間人教員である

ことを指摘する記述も、管見の限り見当たらない。これには、民間

人も軍属として軍服に類似した制服を着用したことも影響していよ

う。⁽⁵⁵⁾ したがって、肯定的な評価を受けた日本語教員がすべて民間人

教員であつたとは断定できない。しかし、英語能力の点で、これを

要件とした選考をへて派遣された彼らには、軍人教員より相対的に

評価が高い人が多かつたと想定はできる。

また英語力を前提として当地で教務に就くことを予定しており、

さらに日本国内での英語排除の風潮のもとで肩身が狭くなつていた

こともあつて、民間人教員には中等教育で英語を担当していた者が

多数含まれていた。⁽⁵⁶⁾ これらのことから彼らの学歴は当時としては相

対的に高く、師範学校出身者に加えて、東京及び京都帝国大学、早

稲田大学や東京外国語学校（現、東京外国語大学）といった高等教育

を経た者、女性では地方のミッシオン・スクールや津田英学塾（現、

津田塾大学）の卒業生が多かつた。⁽⁵⁷⁾ したがって彼らのなかには英語

による日本語教育が可能な者もいた。このような経歴を踏まえると、

彼らはフィリピン人たちに敬意の対象として記憶される余地があり、

他の日本人とは異なつた認識を残すことになつたと考えられる。⁽⁵⁸⁾ そ

の典型とみられるのが、第二章でとりあげた語りのなかで出てきた

「ミス・ツナシマ」である。彼女は名前とフィリピンでの勤務校から

綱島千代子と特定できる。綱島は津田英学塾を出て高等女学校で英

語の教師をしていた。戦時中女学校では英語が随意科目になつたり

廃止になつたりしたが、綱島の学校では廃止になつたようだ。そこ

でフィリピンでの日本語教育に関わることを決意した。彼女は戦後

通訳をしており、英語能力は高かつたのだろう。勤務校では学生や

同僚と「教師冥利をかみしめ」る関係を築いたという認識があり、

戦後も交流があつたことからマニラでの勤務を「人生で一番有意義

な仕合せな時代」と記している⁽³⁸⁾。学生側の語りも踏まえると、綱島の思いは単なる一方的な見当違いとはいえない。反日的な親の影響を受けアメリカの勝利を待ち望んでいた学生でも、綱島の授業や人柄に魅了されたのは、彼女個人の資質に加えて、文明的な存在と認められたからではないだろうか。

植民地における教育機関は支配者が被支配者と向きあう「コンタクト・ゾーン」の代表的な場である。日本統治下のフィリピンの学校は、両者の関係の縮図といってよい様相が見て取れた。フィリピンの普通教育は、もともとアメリカ統治の名目となった文明化のために拡充された。日本軍は既存のこの制度を自らの支配のために転用した。これにより、二つの帝国主義が接木され、日本の教員は、欧米文明を内面化した生徒や教員と向き合うことになった。そこでの支配―被支配の関係は複雑であった。これは、大東亜共栄圏の思想を教える側の日本語教員たちに英語能力が要件となっていたことでもわかる。アメリカの教育を受けた人々は、いわゆるオリエンタリズムの文明―野蛮の関係を内面化していたと考えられ、そのことが回顧録にもあつたような当時の評価の低い一般的な日本人観を生み出した。しかし、オリエンタリズムが人物や行動の評価軸として大きな意味を持つと、その文明の基準に沿った素養があれば、日本人であれ肯定的に受容される余地が出てくることになる。親米フィリピン人たちからも積極的な評価を受けた日本語教師がいたのは、

英語能力によつてその基準を満たしたためと考えられる。日本語教育の肯定的な意味づけをもたらした理由の一つに、アメリカ的文明の体得を意味する教師の英語能力が影響したと考えられることは、皮肉そのものである。

おわりに

フィリピンの人達は帝国間の移動ではなく、アジア太平洋戦争時に、アメリカから日本への支配者の交代という形で二つの帝国を経験した。この交代が戦後体制下のフィリピンでどのように意味づけられたかを考察するために、日本統治の主要政策であつた普通教育をめぐる記憶を取り上げた。着目したのは、日本占領が甚大な被害をもたらしたフィリピンで、日本の教育に対して、均質化の語りだけではなく、異質な語りも提示されていたことである。

この現象の背景として、語りの場における戦後の変化があつた。これは、フィリピンに対するアメリカの軍事・経済的影響力の相対的縮小と日本の経済的影響力の拡大によるもので、このなかで恩恵をもたらしたアメリカ、悲劇をもたらした日本という単純な認識が崩れた。これによつて占領期の教育についての多様な言説が表面化する余地が生まれた。

この多様性を生み出した日本統治期の要因として本稿が注目した

のは、生徒たちが教室で出会った日本人教員に民間人と軍人の二種類が存在したことである。この種類の相違が意味を持ったのは、英語がフィリピンで文明化と社会的地位を表象するようになっていたからである。アメリカは約四〇年間の統治期に、フィリピン全土における恩恵的同化を目指し、普通教育による文明化を実践した。これにより不完全ではあったものの英語を核にアメリカ文明の浸透が図られるとともに、教育の社会的基盤が広く構築された。アジア太平洋戦争時、日本帝国は最後発の帝国として欧米の支配を軍事力で排除した後、旧帝国の遺産に向き合った。アメリカ化したフィリピンの現状を打破するために、日本は日本語を核とした教育を導入したが、それにあたつて、アメリカ統治期に整備が進んだ社会的基盤を利用した。つまり、アメリカによる普通教育が存在したが故に、日本による普通教育は必要となり、また可能となつたわけである。この担い手として、教育を本業とする民間人が導入されたが、彼らにはフィリピンで不可欠な存在となつていた英語力が求められ、その能力ゆえにフィリピン人たちの文明の基準に沿うことになった。こうした経過を見ると、アメリカ統治はフィリピンにおける日本の教育において本質的な存在と見なしてよい。この新旧二帝国の普通教育政策のかみ合わせがあつてこそ、本論で述べたフィリピン人たちの日本統治下の教育の記憶が生み出されたのであろう。

今後の課題としては、日本統治の前にフィリピンを支配していた

もう一つの帝国、スペインとの関係も視野に入れた分析が考えられる。先発帝国・日本帝国・支配地域という三角関係は、南方を中心に日本の勢力圏で見られた定型的な関係だが、フィリピンの場合、アメリカ統治前の領有国スペインが存在した。スペインは、普通教育と呼べるような教育制度を本格的には導入しなかつたとはいへ、日本統治期にフィリピンに多くのスペイン人が滞在し、しかもスペイン語には根強い影響力があつた。このスペインと日本との関係を教育面から、アメリカとの関係も踏まえて研究したい。

注

(1) 近年の代表的な業績として、以下のものがある。駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配——台南長老教中学校からの視座』岩波書店、二〇一五年。

(2) 例えば、以下のような著作がある。石井均『大東亜建設審議会と南方軍政下の教育』西日本法規出版、一九九五年。木村宗男『戦時南方占領地における日本語教育』木村宗男(編)『日本語教育の歴史』(講座 日本語と日本語教育一五)、明治書院、一九九一年、一四五—一五九頁。太田弘毅『フィリピンにおける日本軍政と日本語教育』『政治経済史学』二三八号、一九八六年、二八—四一頁。

(3) 清水展『植民地支配の歴史を越えて——未来への投企としてのフィリピン・ナシヨナリズム』西川長夫他(編)『アジアの多文化社会と国民国家』人文書院、一九九八年、一四八—一七一頁。

(4) 分析の手がかりとして、この地で教育を施した側の記憶も取り扱う。そ

のために、引揚げた日本人教員たちが結成した組織、「元比島日本語教育要員の会」による文集『さむばぎいた』を参照する。この文集においても、教育に関する記述よりも、終戦直前の地獄のような経験についての記述の方が多し。

- (5) Pratt, Mary Louise, *Imperial eyes: travel writing and transculturation*, 2nd ed., New York: Routledge, 2008.
- (6) 「南方諸地域日本語教育並普及に関する件」『興亜教育』一卷九号、一九四二年、六頁。
- (7) 渡集団軍政監部「訓令教育ノ根本方針ニ関スル件(第二号)」『軍政公報』一号、一九四二年、一四—一五頁。
- (8) UNESCO-Philippine Educational Foundation, *Fifty years of education for freedom 1901-1951: prepared under the auspices of the UNESCO-Philippine Educational Foundation*, Manila: National Printing Co, 1953, pp. 78 and 84.
- (9) Kinanar, Thelma B. et al., *Kuwentong bayan: noong panahon ng Hapon: everyday life in a time of war*, Quezon City: University of the Philippines Press, 2006, pp. 108-110.
- (10) Agoncillo, Teodoro A., *The faithful years: Japan's adventure in the Philippines, 1941-1945 (Volume One)*, Quezon City: University of the Philippines Press, 2001, p. 434.
- (11) Jossen, Lauro J., *Will there be war?: there was a war when I was a child*, Quezon City, Philippines: Ateneo de Manila University Press, 2011, pp. 48-50; Kinanar, op. cit., pp. 110-112; Orendain, Joan, "Children of War," Constantino, Renato ed., *Under Japanese rule: memories and reflections*, Quezon City: Foundation for Nationalist Studies, Inc. and BYSCH, Tokyo, 1992, p. 79.
- (12) 松浦勝道「滯比日記」『ろふびあうた』第一集、一九六七年、一一頁。
- (13) Nival, Leonardo Q., *Remember them kindly: some Filipinos during World War II*, Quezon City: Claretian Publications, 1996, pp. 35-37.
- (14) Karganilla, Bernard LM, "Witness," Constantino, Renato ed., *Under Japanese rule: memories and reflections*, Quezon City: Foundation for Nationalist Studies, Inc. and

BYSCH, Tokyo, 1992, pp. 231-232.

- (15) Kinanar, op. cit., p. 115.
- (16) De Gonzales, Purita Echegarria, *Manila: a memoir of love and loss*, Alexandria, NSW [Australia]: Hale & Iremonger, 2000, p. 113; Kinanar, op. cit., pp. 113-114.
- (17) Karganilla, op. cit., p. 232.
- (18) Santos, Alfonso P., *Philippine-Nippon rules: a collection of incidents showing the sunny side of the Japanese occupation of the Philippines*, Metro Manila: National Book Store, 1978, pp. 94-95.
- (19) Pimentel, Solomon B., *War in my eyes: a true story during World War II in Mindanao*, Cagayan de Oro City, Philippines: FB Malubay Mini Enterprises, 2002, pp. 36-37.
- (20) 細田久夫「三十四年後のベニラ訪問——昭和五十二年三月十九日から二十一日迄」『ろふびあうた』第四集、一九八七年、五八—六七頁。
- (21) Santos, op. cit., pp. 74-75.
- (22) Kinanar, op. cit., pp. 115-116.
- (23) Manalac, Fernando J., *Manila: memories of World War II*, Quezon City: Giraffe Books, 1995, p. 18.
- (24) 松田素一「植民地文化における主体性と暴力——西ケニア、マラゴリ社会の経験から」山下晋司・山本真鳥(編)『植民地主義と文化——人類学のバースペクティブ』新曜社、一九九七年、二七六—三〇六頁。
- (25) モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』小関藤一郎(訳)、行路社、一九八九年(原著 Halbwachs, Maurice, *La mémoire collective (Bibliothèque de sociologie contemporaine)*, Paris: Presses universitaires de France, 1950)。
- (26) 蘭信三「中国「残留」日本人の記憶の語り——語りの変化と『語りの磁場』をめぐる」山本有造(編)『満洲記憶と歴史』京都大学学術出版会、二〇〇七年、二二—二五二頁。
- (27) レイナルド・C・イレート「日本との戦争、アメリカとの戦争——友と敵をめぐるフィリピン史の政争」藤原帰一・永野善子(編著)『アメリカの影

のもとで——日本とフィリピン』法政大学出版局、二〇一一年、一一〇—一二頁。

- (28) 中野聡『歴史経験としてのアメリカ帝国——米比関係史の群像』岩波書店、二〇〇七年、二七五—三一五頁。

- (29) Agoncillo, op. cit., pp. 448-449.

- (30) 中野、前掲書、三一七—三八六頁。

- (31) Orendain, op. cit., pp. 87, 88, 125-129.

- (32) リカルド・トロタ・ホセ「フィリピンにおける戦争記念碑と記念式典——踏査的観察」リディア・N・ユー・ホセ(編著)／佐竹眞明・小川玲子・堀芳枝(訳)『フィリピンと日本の戦後関係——歴史認識・文化交流・国際結婚』明石書店、二〇一一年、三三一—三六六頁。

- (33) Santos, op. cit., pp. vii-ix.

- (34) Karganilla, op. cit.; Manalac, op. cit.

- (35) Karganilla, op. cit., p. 218.

- (36) Manalac, op. cit., p. 26; Santos, op. cit., pp. 29-31, 94-95, 147, 168.

- (37) 中野、前掲書、一五四—一五五頁。

- (38) 木下昭「日本語教育のトランスナショナル化——ダバオ日系社会の変遷と植民地主義」蘭信三(編)『帝国以後の人の移動——ポストコロナアリズムとグローバルイズムの交錯点』勉誠出版、二〇一三年、八六七—九〇六頁。

- (39) 説田長彦「〔資料〕比島派遣日本語教育要員配置表」『さむばぎいた』第七集、一九九〇年、一一—一六頁。

- (40) Natural and Historical Foundation (Puerto Princessa City, Philippines), *Puerto Princessa during the Second World War: a narrative history, 1941-1945*, City of Puerto Princessa, Palawan: Natural and Historical Foundation, Palawan Museum, 1998, pp. 27-28 and 31-32.

- (41) J A C A R (アジア歴史資料センター) Ref. C13071888200「アラバン・島警備隊陣中日誌(防衛省防衛研究所)」。

- (42) 数少ない例として、垣兵団歩兵九連隊所属の上林吾郎は、ルソン島南部のナガ市で一九四二年一〇月頃から翌年九月にかけて教務に就いた時のことを、勤務時に執筆した私信を交えた短文で残している。彼は、ある程度英語が使えたようで、見よう見まねで教育に携わっていたようだ。上林吾郎「サントアイサベラ学院のころ」『吾等かく戦えり——比島に於ける垣兵団』桃陵会、一九七一年、三五四—三五九頁。

- (43) フィリピンと同様に日本語教育が行われたマラヤに関する研究によると、初期の「兵隊先生」はわざと人民を威圧しようとして恐がらせる面があったが、後から来た文官あるいは民間人の教員はそうではなく、比較的現地住民に好意的に迎えられるようになった。松永典子『日本軍政下のマラヤにおける日本語教育』風間書房、二〇〇二年、一四〇—一四八頁。

- (44) 木下昭「占領地日本語教育はなぜ「正当化」されたのか——派遣教員が記憶するフィリピン統治」『東南アジア研究』五二巻二号、二〇一五年、二二—六—一三七頁。

- (45) Pratt, op. cit., pp. 6-7.

- (46) 皇陸夫『ルソン戦とフィリピン人——ルソンで日本軍は何を見たか』楽書房、一九八一年、一八三頁。

- (47) 佐竹久『髯髯たるルソン戦線——若き憲兵の従軍記録』三崎書房、一九七三年、七七—七八頁。

- (48) 福原治夫「四十年振りの再会とユウカン」『さむばぎいた』第六集、一九八九年、五二頁。

- (49) Bureau of the Census and Statistics, *Statistical abstracts*, Manila: Bureau of Print, 1942, pp. 33-35.

- (50) Molina, Antonio M., *Dusk and dawn in the Philippines: memoirs of a living witness of World War II*, Quezon City: New Day Pub, 1996, p. 143.

- (51) Karganilla, op. cit., pp. 248-254; Manalac, op. cit., pp. 28-53; Santos, op. cit., pp. 69-70, 71.

- (52) Karganilla, op. cit., p. 249.
- (53) Santos, op. cit., p. 71.
- (54) 例えば、日本占領期に再開された高校で日本語を担当した日本人が、軍人か民間人かわからないという語りがある。Karganilla, op. cit., p. 201. またサントスの著作で取り上げられた語りのなかに、フィリピン人に心を寄せた日本人の例として、將軍の息子で英語の教育を受けた「マサキ」を挙げているものがある。彼は軍人とされているが民間人で、真崎甚三郎陸軍大將の次男のことであると思われる。彼は日本語教師として派遣され、現地では主に通訳をしていた。Santos, op. cit., p. 80.
- (55) 当時の軍政監部総務課長は、英語が敵性語となつて仕事を失つた教員の存在を念頭に、彼らにフィリピンの小学校での英語による日本語教育を担わせることにした、と述べている「読売新聞一九六九年一月七日」。
- (56) 山田秀吉「資料」比島派遣教育要員の調査『やむばぎいた』第四集、一九八七年、一一二九頁。
- (57) フィリピンの人達に、日本の軍人も「人間だ」と思わせた他の事象は、彼らが見せた家族に対する思いであつた。Mandalac, op. cit., p. 30; Santos, op. cit., p. 71.
- (58) 網島千代子「フィリピンでのことども」『やむばぎいた』第八集、一九九一年、五五―五八頁。

